

泣きんぼうの話

小川未明

青空文庫

あるところに、毎日まいにち、よく泣くな子こがありました。その泣き様ようといったら、ひい、ひいといって、耳みみがつんぽになりそうなばかりでなく、いまにも火ひが、あたりにつきそうにさえ思おもわれるほどです。

その近所きんじよの人々ひとびとは、この子こが泣くなと、

「また、泣きなんぼうが、泣きなだしたぞ。ああたまらない。」といつて、まゆをひそめました。

「泣きなんぼう」といえば、だれひとり、知しらぬものがなかったほどでありました。

こんな泣きなんぼうでも、おばあさんだけは、目めに入るほど、か

わいいとみえて、泣きんぼうの後から、どこへでもついて歩きま
した。

「いい子だから泣くでない。そんなに泣くと、血がみんな頭に上
つてしまつて大毒だ。みなさんが、あれ、あんなに見て笑つて
いなさる……さあ、もう、いい子だから、泣かんでおくれ。」と、
おばあさんだけはいいました。

そんな、やさしいことをいつたくらいで、きく子ではありませ
んでした。

ある日のこと、往來の上で、なにか氣に入らないことがあつ
たとみえて、泣きんぼうは、泣き出しました。おばあさんは、ま
た、大きな声を出しては困ると思つたから、

「なにがそんなに気にいらなかったのだ。いつておくれ、なんでもおまえの氣に入るようにしてやるから。いい子だから、もう、そんなに大きな声を出して泣かないでおくれ。」と、あとから、子供について歩いて、おばあさんは頼みました。

泣きんぼうは、やさしくいわれると、ますます体を揺すぶって、空を向いて、両手をだらりと垂れて、顔いっぱいに大きな口を開けて泣き出しました。いがぐり頭を日にさらしながら、涙は光って、玉となって日に焼けた顔の上を走りました。

白髪のおばあさんは、さしている日がさを地面に置いて、子供をすかしたり、なだめたりしました。二人の立っている往來の空には、とんぼが、羽を輝かしながら飛んでいます。

「やだい。やだい。ひい——ひい。」と、子供こどもはいつて、泣きなました。

日盛ひぎりごろで、あたりは、しんとして、強い夏つよなつの日光にっこうが、木の葉はや、草くさの葉はの上うへにきらきらときらめいているばかりでした。ひとびとは、家うちの中なかで、昼寝ひるねでもしようと思おもっているやさきなものですから、頭あたまを枕まくらからあげて口説くどきました。

「また、泣きなきんぼうが泣きなきました。あんな、いやな子こは、この世せ界かいじゅうさがしたつてない。」と、のしつたものもあります。

「坊ぼうや、いい子こだ。おばあさんが悪わるかったのだから、もう泣なかんでおくれ。ほれ、ほれ、みんな出でて坊ぼうやを見みてたまげていなさる。あつちをこどもごらん。」と、おばあさんは、子供こどもの気きをまぎらせよう

と苦心くしんしました。けれど、子供こどもは、泣きやみませんでした。

このとき、あちらの家いえから、だれか頭あたまを出だしました。

「あ、やかましくてしょうがありませんね。泣なかないようにしてください。」といいました。

「ほら、ごらん、やかましいとおっしゃる。いい子こだから泣なくでない。」と、おばあさんは、しわの寄よった額ひたいぎわに汗あせを結むすんで、子供こどもに頼たのむようにいいました。

すると子供こどもは、かえってあちらの方ほうを向むいて、いまよりも、もっと大きな声おおこえを出だして泣なきました。どうして、こんなに大きな声おおこえが、こんな子供こどもの体からだから出でるだろうか、だれしも思おもわないものがなかったほどであります。

おばあさんは、孫の泣くのを見て、

「いまに、みんな血が頭に上つてしまつて、ガンといつて、頭が

われてしまふよ。」と、心配しました。

昼寝をしようと思つて、家の中で、できなくてまゆをひそめて

いるものは、いまにもあの声から火が出て、あたりの家や、草や、

木に燃えついて、空が真紅になりはしないかと思つていたので。

おばあさんは、ほんとうに困つてしまいました。ちようど、そ

のとき、だれも通らない往來を、あちらから、男が、自転車

に乗つてやつてきました。

おばあさんは、子供をすかすために、

「もし、もし、この泣く子をつれていってください。」と、おば

あさんはいいました。

「よしきた。さんざ、あつちの野原へいって泣くだ。」と、男は、ひよいと泣く子を抱きあげると、おばあさんの止めるまもなく、さつさと、あちらの野原の方へ走っていきました。

男は、自転車に、泣きんぼうを乗せて、広い野原の真ん中へつれていって降ろしました。

「さあ、ここでうんと泣くんのだ。そうしたら、黙るだろう。」と、男はたったひとり、子供を野原の真ん中に残して、自分は、自転車の車に乗って、また、どこへとなく走ってしまいました。

子供は、野原の真ん中で、大きな声を出して泣きました。けれど、だれも、その泣き声を聞きつけるものはなかったのです。太

いよう 陽と雲くもとが、この声こえを聞きつけて、びっくりしました。そして、じつと下したを見つめていました。

「ああ、かわいそうに、あの子こを花はなにしてやれ。」と、太陽たいようは、ひとりひとりでいいました。

このとき、おばあさんが、とぼとぼと小径こみちを探索さがしながら、野原のほらへ歩あるいてきました。

「あんなに、おばあさんが子供こどもを探さがしています。子供こどもが見つからなかったら、どんなに歎なげくでしょう。」と、雲くもは太陽たいように向むかっていいました。

「あの老婆ろうばも花はなにしてやれ。」と、太陽たいようはいいました。子供こどもと老婆ろうばが、二人とも村むらからいなくなったので、人々ひとびとは驚おどろ

いて、方々ほうぼうを探さがしまわりました。けれど、ついに見み当たらずに
しまったのです。そして、広いひろ、広いひろ、野原のほらの中なかに、明あくる日ひ、
一本ぽんの脊せのたか高いひまわりの花はなと、一本ぽんのかわいらしい、ひなげし
が咲さいていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「時事新報」

1922（大正11）年8月16日

※表題は底本では、「泣《な》きんぼうの話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「泣きん坊の話」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泣きんぼうの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>